平成３１年１月１７日
横浜市立浦舟特別支援学校

連携支援だより　第３号

新しい年がスタートしました。今年もどうぞよろしくお願いいたします。
浦舟特別支援学校は、横浜市立では唯一の病弱特別支援学校です。
連携支援だよりを通じて、研修会のお知らせや、その様子等、お伝えできたらと思います。
平成３０年１１月 30 日に特別支援教育総合センターとの共催で、第２回病弱教育専門研修会として済生会横浜市東部病院こどもセンターからﾁｬｲﾙﾄﾞﾗｲﾌｽﾍﾟｼｬﾘｽﾄ（Child Life Specialist:CLS）の井上絵未さんをお迎えし、『病気をもつ子どもの課題と様々な連携について』をテーマにご講演いただきました。
現在日本国内で活躍されている方は 30 施設 44 名とまだ少なく、県内でも２名しかおりません。
そのため今回、子どもを支える日々の実践について大変貴重なお話を伺うことができました。

○ＣＬＳとは

子どもや家族の医療に対する不安や恐怖を最小限にすることを目的とした専門職です。医療現場で子どもの状況理解と対処をサポートし、子どもの潜在的に持っている『力』を最大限発揮できるようアプローチするといった活動をされています。アメリカに本部を置く　Associetion for Child Life Professionals という機関によるアメリカ発祥の認定資格です。

○子どもたちにとって病院（医療）とは

子どもにとって病院というところは、知らない人だらけ、知らないものに囲まれている環境です。不安・怒り・疑問・恐怖・緊張・混乱・怯え・無気力といった様々な感情が沸き、激しい反応（泣く、叫ぶ、家族にしがみつく、処置や検査の際の抵抗、破壊など）、消極的反応（睡眠パターンの変化、コミュニケーション減少、活動性の変化、食事量の変化、緊張・不安・恐れ）、退行行動（歩行、排泄、食事、生活習慣）を引き起こすことがあることでした。

○年齢による心の変化

６～１２歳（学童期）では好奇心、自信、肯定感が芽生え、入院により家族や友だちから離れる不安や寂しさ、痛みへの恐怖などネガティブな反応の増加がみられるという傾向にあり、１２～１８歳（思春期）ではアイデンティティが形成され、怒りも芽生えるそうです。本人への病状の告知も家族が望まないケースもありますが、本人にとっては大人ばかりで話さず教えてほしいと思う気持ちがあったり、学校や進路のことがプレッシャーになっていたりの問題もあるそうです。学校から離れたことで居場所のない心配にかられることも考えられます。薬による体の変化やボディイメージへの大きな影響も不安の要素になっていると話されていました。

○家族への影響

病気により子どもの様子が変わるとその家族にも辛さが生じます。自責の念や罪悪感などが生じたり、治療に関して意思を決定する事への重圧感も感じられることがあったり、様々な気遣いとともに家族の生活環境も変わります。そのような生活やきょうだいへの対応等、さらに多くの問題を抱えることになります。
本人を支える家族にはそのような背景がある事を改めて整理してお聴きすることができました。

○ＣＬＳの介入について

病院では様々なスタッフが子供を支えています。医師、看護師、教員、MSW(医療ソーシャルワーカー)、薬剤師、PT,OT,ST、薬剤師、保育士、栄養士等がいる中で、ＣＬＳとしてのどのように介入しているかについて、大きく３つの視点でお話しされました。

遊ぶこと：子どもの強さを引き出し、入院生活を充実させるサポート
子どもや家族を知り、信頼関係の構築や発達段階に見合った活動を通しての関係作り。

支えること：病気と向き合うサポートとして、例えば検査などへのこころの準備（ﾌﾟﾚﾊﾟﾚｰｼｮﾝ)、対処行動の促進、疾患理解のサポート、きょうだい支援など

整える、つなげること：学校との橋渡し、移植医療への橋渡し、移行期支援の土台作り

○学校との連携について

退院する前に、家や学校で生活していくことへの不安を解消することとその準備として、子ども向けに作戦シートを用いたり、学校の先生方へ病気についての説明等のプリントを保護者に渡して、配慮事項などの復学に必要な知識を引きつぎに用いたりする取り組みの様子をお聞きしました。改めて病院でのＣＬＳさんのお仕事を知ることができました。そして、その取り組みを見習い、私たちの教育的かかわりも改善していきたいと思いました。

学校とは日常の象徴であり、戻りたい場所であると同時に、一歩踏み出す勇気が必要な場所。普通でいたい場所、病気を忘れられる場所である学校にはいつも気にかけてほしい。自分は忘れられてはいないか？と言う不安を持つ中で、学校の先生方には「忘れていないよ」と言うメッセージを送り続けて欲しいと話されました。病気になったからと何かをあきらめさせたくない。どうすればできるかを考えていきたい、という言葉も印象的でした。

○医療と出会ったからこそ・・・

入院してたくさんの出会いがあり、自立もし、家族のきずなが深まることもあります。入院して日常が『あたりまえ』であったことに感謝をすることもあります。入院したからこそ普段できない経験ができるという考えをもつこともあります。そして入院したことで、逆境を乗り越えた自信をもち、治療を乗り越えるHERO HEROINE.となれます。　辛い体験をバネにして成長する心的外傷後成長（ＰＴＧ）がみられることがあるのはその一例です。病気をしてもその経験からいろいろな力になっていることを井上さんからお聴きし、私たちは様々な現場で出会う子ども達に、そのような力が身に付けられるように、今後の支援に生かしたいと思いました。

☆YCAN 受講システムで受付中！

＜研修会のお知らせ＞

第３回　　２月６日（水）　１５：３０～１６：４５　　南公会堂

「病弱教育と医療のこれからの在り方」
～子どもとの関わりの中での様々な課題～
講師：昭和大学大学院　保健医療学研究科　准教授　副島　賢和氏
（昭和大学病院内さいかち学級の先生です。ドラマ「赤鼻のセンセイ」のモデルです。）

病気などが理由で、市内の病院に入院しているお子さん、登校ができていても病気に対する配慮が必要なお子さんについて、教育相談を受け付けています。
学校からだけでなく保護者からの教育相談も受け付けています。
担当：浦舟特別支援学校　特別支援教育ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　荻野　℡２４３－２６２４

＊お手数ですが全職員にご回覧ください。